

民俗博物館だより

Vol. X No. 1
1983. 6. 15



▲大峯山寺の戸開式

目次

十津川の民家—県文・旧木村住宅について—(大和の民家⑬)……	1
当館収蔵機にみる改造痕について(物質文化⑨)……………	3
大峯山寺の戸開式(大和の民俗行事⑩)……………	5
月ヶ瀬村桃香野における薬の活用(民俗資料調査抄報⑳)……………	7
お知らせ……………	7

十津川の民家

— 県文・旧木村住宅について —

長谷川晋平

旧木村家住宅は吉野郡十津川村大字旭字迫に所在した民家である。

この民家は通称「旭ダム」を関西電力株式会社が建設するにあたって、奈良県が同社から寄贈を受け、昭和57年度において復原完成したものである。昭和58年7月1日から一般公開するにあたって、当民家の概要を説明する。

木村家はいつからその地に定住したか定かでない。当家所蔵の嘉永4年(1851)・安政5年(1858)の「村差引覚帳」によれば、その当時、小川村の村役を務めていた家柄で、林業・農業を生業としていた。

吉野郡地方の屋敷・田畑は傾斜地にある。屋敷地は僅かな平地を求め、上下部に石垣を積み狭長な敷地を造る。この中央に主屋を建て、左右に納屋・土蔵・柴小屋等を配し、表側に表門・堀をしつらえるのが一般的である。

当家の旧屋敷は、旭川南岸の緩斜地に北向きに構え、中央に主屋が建ち、付属屋は主屋前を横し字型に配置する。このうち納屋を主

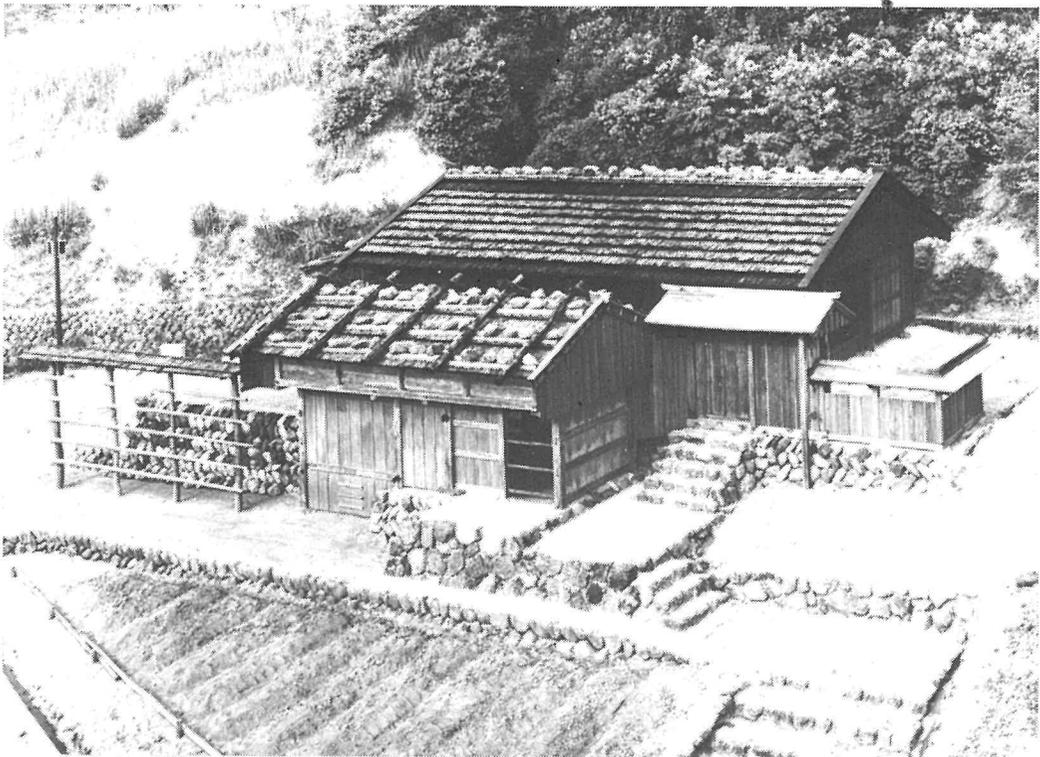
屋敷地より一段低い所に建て、この東側に堀、西側へは表門と物置、直角に脇門がともに接続し、建てられていたのである。

当公園に移築されたのは、そのうちの主屋と納屋、表門である。現移築地の方位は敷地の関係上、やむなく北から西向きに変えたが、敷地の高低および配置、建物間の距離は旧状通りとした。併せて屋敷周辺整備として、吉野山間の特色を示すもののうち「ハデバ」・「ハイガマ」と屋敷に上る石階段、さらに傾斜地に畑等を修景整備したのである。

移築建物の建築年代は、主屋が文政4年(1821)の棟札(祈禱札)によって明らかである。しかし、納屋および表門には直接示す資料を欠くが、形式手法上から19世紀中頃とみられる。

主屋の規模は総間口約6間半(12.46m)、奥行約3間半(6.75m)の大きさである。

外観は棟の高さ4.2mの切妻造に、庇が北側に付き、屋根は勾配ゆるく、トージ葺(杉皮



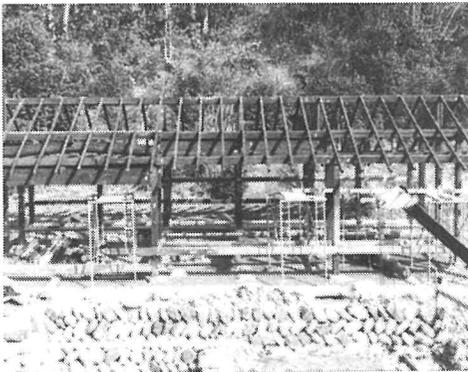
▲旧木村家住宅全景(正面は納屋、奥に主屋、右手は表門と堀、左手にハデバ)

でふく葺足が細かい)である。

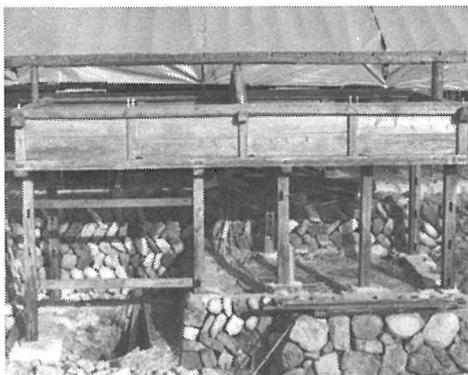
間取りは横一列に部屋をとる。下手からダイドコ(セイジ)8畳室、デエ(デイ)8畳室、ザシキ6畳室が並び、上手二室の表側に縁(幅1.26m)をとり、裏側は細長いナンド(ネマ)を設ける。下手のダイドコは後方へ約1.5m後方へずらし、表側をドマとする。北側の庇部は前後3区に仕切り、前の間は柴入れ、中の中間は物入れ(流し場にも利用か)、後の間が味噌部屋である。

構造部は極めて簡単である。上屋2間の位置に柱を立て、頂部に梁を架けて母屋桁を組む。中央は棟束で棟木を受ける。下屋は上屋柱と下屋柱間を繫梁、下屋柱頂部でこれと軒桁を組む。床廻りおよび内法箇所は足固め、指物、貫で組み固めた構造である。

造作はユルリ(囲炉裏)がデエ、ダイドコの二個所に設けられ、畳敷はザシキ一室のみで、この部屋には床・仏壇が取付く。その他の部屋は板敷で、ドマは一段低い床となって、北側に唐臼、藁打ち石を据えつけている。天井は上屋部分と縁の南側を根太天井、ナンド上は棹縁天井である。ドマ・ダイドコ境は開



▲主屋組立中



▲納屋組立中

放とするが、この他の間仕切りは、建具が板戸と明障子の2種類である。内外の壁はすべて板壁である。

納屋は間口6.06m、奥行2.42mの規模で、棟の高さ3.44mの切妻造である。屋根はノシ葺(杉皮葺)に石を乗せ、さらに丸太で押えた形式である。

間取りは中央に狭い土間をとり、南側にウマヤ(牛小屋)、北側は便所とし、この部屋の東側に物入れを付設する。

構造は西側を掛出して、小屋内を広めツシ二階としている。また、便所北側の柱が延び高床形式で、床下には大きな桶を埋込んだ便槽がある。

表門は棟門(柱間2.59m)造で、総高さ2.73m、屋根はソーギ葺(薄く割った杉板)である。

以上が移築復原された間取りや姿である。そのうち、納屋および表門はすべて建築当初に復したが、主屋は文政4年当時の規模ではない。即ち当初の規模は間口4間(7.93m)、奥行は現在と同一で、ダイドコ・デエの二室からなる切妻造であって、ザシキ部と北側の庇が建築後まもなく増築されたことが、諸調査の結果明らかにし得た。従って、今般の復原に当っては増築期の姿、間取りに復した。

これは十津川地方の民家の発達過程を示すばかりでなく、付属屋が後年に建てられ、屋敷構えが拡充して来た過程を現実視していただくところにある。

本建物の特徴としては、①建物の建ちが低く、屋根が杉皮葺の石置である。②囲炉裏が2個所に設けられる。③土間がなく板敷、板壁である。④両妻に棟持柱が立つ。

これらは実在した十津川地方の気候・風土によって、その時代に工夫され生み出されたものであることは、言うまでもないが、古式な一面も示しているのである。

なお、杉皮葺の手法について、当村の人達拾数名から聞き取り調査、類似調査を実施した。この報告は紙数の都合上、別の機会へゆずるがそのうち、この地方でソーギ葺(板葺)は意外に新しく、それも明治頃から葺かれたことや、杉皮葺に2通りあって、トージ葺、ノシ葺(ムサ葺、タケ葺)の手法があることを付記する。

当館収蔵機はたにみる改造痕について

大宮 守人

●民具と使用痕跡

民具の改造痕はそれを使用し、あるいは製作した人々の思考の痕跡であり、これは使用痕といえる。これらは道具として使用する間に様々な使い勝手の追求の中で残されたものであり、人間と道具の関わりを探る上で格好の資料となり得る。

人間の思考は通常、文字や図絵として止められるが、民具などに残された使用痕はこれに匹敵する重要な手がかりである。しかし文章や図絵のような積極的な表現手段とは違い使用途上の傷跡であって消極的・二次的の感否めないで類例の厚みによって支えられ検討されなければならないものである。

この点、即効性のある資料価値を発揮できにくい憾みがあるが、民具研究における重要な注目点として細部にわたる類例の整備が望まれるところである。

昭和57年度において、当館収蔵の機を修理するにあたり、細部の観察を行った結果いくつか改造痕を見出したが、ここではその一つに少々検討を加えてみたい。

●機はたの特色

修理の対象となった6台の機は、いずれも腰掛けの位置から見て間丁はんぢやう(経糸を張る部分)の角度が比較的強い傾斜を持ってせり上っている「大和機」といわれるもので(写真1)、「バタン」と呼ばれる改良機が普及する以前から使用されていたものである。



▲継ぎのある前脚

この機の特色は、比較的強い間丁の傾斜角度に代表される。

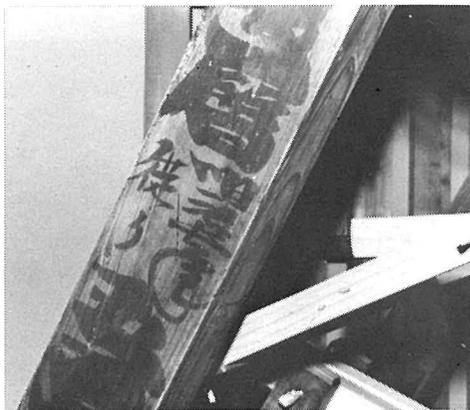
●前脚に見られる改造痕

当館収蔵の大和機18台の内4台に前脚の下部に対して後に材を継いで全体の傾斜角度を強くしようとした改造痕が認められる。

この4台の機の傾斜角度を間丁のレベルで接地角度を測定すると、27°(No245都祁村白石)、33°(No38大淀町岩壺)、33°(No9菟田野町宇賀志)、31°(No85山添村助命)であり角度は30°±3°の範囲にある。

一方、継ぎ足しのない機11台の場合は30°から45°までの分布があり、その中でも30°±3°の範囲以下のものとして30°のものが3台あり、その他は35°以上で最高45°までのものが見られる。前脚に継ぎ足し改造を施したものにおいてすら30°±3°程度の傾斜角度であるのに、このような改造によらず製作当初から最高45°もの強い間丁の傾斜を持つものもあり、その平均は38°で、いずれも継ぎを施した機よりも急傾斜である。

継ぎ足し改造の理由としては、長期の使用の間に脚の接地部が老朽化したために先端を切り落して別材を組み込んだという事も考えられるが、屋内で使い続けられた機の場合さほど脚先のみが老朽することは考えられないし、前脚の先端を継ぎ方法として旧来の状況を残したまま側面から材をあてがっている例もあるので、この改造については機織りにお



▲明治7年の紀年銘

ける技術的問題解決の手段として施された可能性を追求すべきだと考える。

つまり、大和機では前脚に継ぎが施されていないものに傾斜角度が強いのというのは、これらの機は前脚に継ぎをしたものよりも新しいものであることが推察できる。

前脚を継いだ機は何らかの理由により間丁の傾斜角度を強くする必要から後に加えられた改造の痕跡であり、大和における織りの技術的変遷をさぐるのに重要なものと考えられる。

しかし、この理由については種々の方法での探求を要するが、一応次の2点を推定してみたい。

①経糸の打ち込みを強くするために傾斜を増し、篋の打ち込み時における惰力を大きくしようとした。

②急傾斜により、腰掛け位置からの経糸の並びの監視を要易にしようとした。

などの理由ではなかろうか。①については厚みのある丈夫な布にするため。②についてはこまかい緋文様などを織る時には経糸が少しでもずれると緋文様が構成されず、出来上がりに著しい影響を与えたのでその対策とも考え得る。

また継ぎ足し痕のある4台の機は、都祁村大淀町、菟田野町、山添村という地域的なちらばりのあるにもかかわらずこの様な改造が施された理由として、かつては女の賃仕事として広く行われていた大和緋や、奈良晒の織りを手掛けた機であった場合は織り元からの指導や助言があつて同形態の改造が各地で行われたのではないかと考えられる。

大和緋は江戸後期頃から奈良盆地南部を中

心に主に白緋として織られたが、微細な緋も多く経糸のずれは重要な問題であつたと思われる。改造痕のある一台は大淀町岩壺(No38)のもので墨書銘に「御所はたや萬蔵」(紀年は不詳)と見え、大和緋の中心でもあつた御所の機であることから白緋の賃織りをした機であつたといえる。

また奈良晒の方は江戸初期より奈良及び周辺部で盛んに行われた麻の白布で、奈良奉行の庇護のもとに幕府へも献上され、武士の袴の原布として珍重されたというものである。

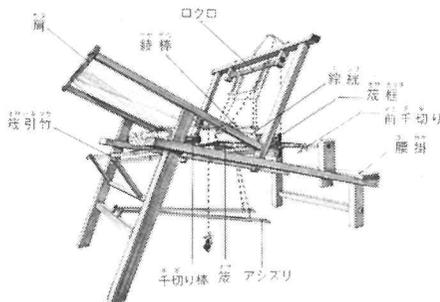
前脚に継ぎのある4台の機の内2台は都祁村白石と山添村助命のものであり、この地域では奈良晒の材料となる麻の経糸(カセ糸)及び緯糸(ヌキ糸)を紡ぐ芋績みという手仕事盛んで、麻布を織る場合もあつた。

このように賃仕事として機を織る場合の多い状況下では品質管理の一環として織り元からの指導が機の改造にも及んでいたことは充分考え得る。

なお、継ぎ痕のない急傾斜の大和機は当館収蔵機の大半を占めているが、これらの機の紀年銘として「明治七年」「明治二十二年」の2例が読み取れた。

これにより前脚に継ぎ痕のない機は明治期に製作されたものと考えられるので、これらよりも製作年代が古いと考えられる継ぎ痕のある機は幕末から明治初期頃のものとして推定したいが墨書銘等が全く見られないので確証は得られない。4台共全く墨書が見られないのは長い使用期間中に消滅したと考えたいところであるが、今後の課題としてさらに種々の方法により探求してみたい。

以上、ここでは機の前脚に見られた改造痕を通して種々の推察を行ったが、このような民具資料の細部についての伝承は跡切れているものも多く、改造痕からの検討・類例の整備には今後更に努力したいと考える。



おり機の構造と各部の名称

▲写真1 大和機の図

大峯山寺の戸開式

浦西 勉

吉野郡のほぼ中央部に南北につらなる山々がある。吉野山から山上ヶ岳、大普賢岳、弥仙、八経ヶ岳、釈迦ヶ岳、大日岳、玉置山を経て、熊野まで尾根が通じている。いわゆる、大峯の奥駈道の山々である。吉野・熊野の修験者達にとって、信仰の対象の山々であり、かつ修行の場でもある。この吉野、熊野の修験の山々は古くから開かれ、今日も根強い信仰を持続している。ところで、これらの山々を信仰したり、修業したりするのは、修験道にたづさわる修験者たちのみではない。近畿における町や村の行者講（山上講・大峯講）を組む一般の人々が、この吉野郡の山々の根強い信仰者であり、修験道をささえ山を護ってきた人々である。近畿では大峯山（山上ヶ岳）へ登らなければ一人前の男になれぬと言われている。行者講は、これらの村や町に住む人々が結成し、根強い大峯山への信仰を持ち、たびたびこの山へ足を運ぶ風習は今日も続いている。大先達と呼ばれる村の長老が若者をつれて山に登る「山上さん詣り」は古くからの習慣である。

さて、このような行者講の人々が山上ヶ岳へ登るのは、5月3日の大峯山寺の戸開式がすんでからである。戸開式は、村や町の行者講にとって、山開きにあたる。この日から、9月22日の戸閉式までの間、行者講の人々が山上ヶ岳に登るのである。

今回、この山上ヶ岳の山頂で行われる大峯山寺の戸開式の行事を紹介することにする。

* *

5月2日、役講と言われる八つの講（阪堺

八講）の人々（役員）が山上ヶ岳山頂めがけて登る。八つの講とは 岩組・井筒組・鳥毛組・五流組・光明組・京橋組・三郷組・両郷組である。それぞれ各講（組）には自分の宿坊が定まっている。山頂には5つの宿坊があり光明組・両郷組・五流組は桜本坊、井筒組・鳥毛組は竜泉寺、光明組・岩組が竹林院、三郷組が喜蔵院、岩組が喜蔵院と定まっている。各講の役員達は自分の宿坊へ5月2日に入り、宿坊の役行者を拝し、夕食をとり翌3日未明の行事にそなえる。

3日未明（2時）に1番鐘が打たれ、起床し衣装をつける。2番鐘が2時半に打たれ大峯山寺前の本坊に集合する。3番鐘が3時に打たれ行事が始まる。本坊において、座る位置が定っており、正面に大峯山寺護寺院5ヶ寺の年番の2ヶ寺院が座る。毎年洞川竜泉寺と吉野山から1ヶ寺（58年の場合桜本坊）が座につく。左・右には吉野山・洞川区の信徒総代と特別信徒総代がならび、敷居をへだてて各講3名ずつ座につく。各講3名というのは鍵を受ける人1人、鍵をあらためる人1人、見習いの人1人である。

58年の場合の式の次第は①洞川区長挨拶 ②桜本坊式辞 ③鍵渡し ④続経 ⑤吉野山区長挨拶であった。特に鍵渡しが重要であって、そのことを次に記す。鍵は大峯山寺を開けるためのもので「秘密」「正面」「ハカシ」の3つがある。まず桜本坊から「秘密の鍵」が年番である両郷組に渡される。次に竜泉寺から「正面の鍵」を三郷組に渡される。三郷組の人はこれを正面の鍵であることを確かめ



▲大峯山寺



▲山上ヶ岳の宿坊

ると、一たん竜泉寺に返す。そして「正面の鍵」の年番である岩組に渡される。次に「ハカシの鍵」は桜本坊から今年の年番である五流組に渡される。このようにして3つの鍵渡しは終了する。この本坊での式が終了すると一同は外へ出ていよいよ大峯山寺の戸開けになる。

鍵を受けた年番の人達は一度大峯山寺の鳥居まで下り、そこから人馬になって、鍵を持った者がこれにのり、大峯山寺境内までかけ登ってくる。境内では人馬が激しくねりまわり人々も続く(表紙写真)。この間、人馬でねりまわっているのをしりめに「秘密の鍵」を担当する両郷組と鳥毛組の人達が秘密の戸扉を開けにゆく。秘密の戸扉は、大峯山寺の左側にある。戸が開けられ講の人々が内に入ってゆくとすぐその戸はしめられる。秘密の戸扉から入った人達は内陣の役行者像の扉を開けたり燈明をつけたりして、内陣の準備をする。この準備が終ったころをみはからって、人馬も終り、正面の戸口に人々が集まり、開けられる。戸が開くといっせいに人々は堂になだれ込む。堂内は内陣と外陣とを区別する木の結界があり、最初は講の主だった人が内陣に入り、その他の信者はこの結界から、うすぐらい内陣をのぞきみするだけである。内陣に入った講の人々は本尊蔵王権現を拝し、左へ回り秘密の役行者と岩組の役行者の前で般若心経一卷を唱え錫杖のふる姿はもうれつなエネルギーである。そして「ハカシの鍵」で出口の戸が開けられ人々はここから境内に出る。ハカシのみはりは井筒組と五流組とで行う。結界で待っていた信者が約50人ずつ、内陣に入り中で同じことがくり返され、ハカシ

から外へ出る。内本陣尊を拝した信者は境内で柴灯護摩をたく。このころになると夜が明け、信仰の山にふさわしい宗教的雰囲気の中で満足感にひたる思いがして終了するのである。行事に参加した人々は自分の宿坊に帰り朝食をとり、山上ヶ岳を下山し、洞川の竜泉寺や吉野山の寺へ参詣し帰るのである。5月2日から3日にかけての真夜中での戸開式は、宗教的伝統と、講の人々のものすごく激しいエネルギーとの内に今日ではめずらしい厳粛な行事と言えよう。夜が明けた山上ヶ岳の静寂は未明に行われた戸開式がうそのように感じられる程である。

さて、この大峯山寺の戸開式は、先にも書いたように、村や町の大峯山を信仰する人達にとって山開きの意味があり、この日以後山上詣りの人達が山へ登るのである。

* * *

大峯山寺の戸開式は5月3日の春先に行われているが、このころ各地で山ノボリ、ダケノボリ、あるいは山の口が開くなどと言って、山登りをする例がある。たとえば二上山や神野山、竜門岳などのダケノボリ、都祁、室生の山ノボリ、曾爾・御杖の山の口が開くというのがその例である。このことはいかにも、山が解禁になった感を与える。大峯山寺の戸開式とこれらの山ノボリとは少し性格は異にするであろうが、山が解禁になったという点に関して類似している。春先、山に登る風習が古くから各地にあって、その風習が母体となって山上詣りも発達したのではなかろうか。



▲一番鐘にて起床した役講



▲秘密の鍵で扉を開ける



▲正面の扉を開ける



▲鍵渡し



▲秘密の扉と鍵穴



▲ハカシの出口をみはる役講

月ヶ瀬村桃香野における藁の活用

徳田陽子

奈良県の北東部に位置する大和高原の一部に月ヶ瀬村があり、梅林が多く、現在も梅の名所であるが、昔はこの梅から西陣織の紅花等に使う鳥梅を生産した。

月ヶ瀬村桃香野でも鳥梅の生産が盛んであったが、需要が沈滞し、明治末から大正にかけてほとんどの家が作るのをやめた。明治はじめ頃から始まった養蚕も一時は盛んであったが大正4年頃から衰えていった。そして、それらの生業にかわったのが、お茶の栽培である。このほか桃香野では稲作もしているし、冬の間は、昭和35年頃まで炭焼きもしていた。ここでは、以上の生業等と稲作の副産物である藁の活用についての調査の一部を紹介したいと思う。

まず、自家製の藁細工をみてみよう。

1. **ゴンゾ**：ワラジと似た形で、足の甲の両側の部分を編みあげて、足袋、脚絆、さらに足の甲に布をつけてはき、雪の降ったとき山行き（主に炭焼き）に使用した。
2. **ユキグツ**：雪が10cmぐらい降ったとき使用した。
3. **ゾウリ**：山行きのときには足袋をはいてからはいた。1日で上手な人は20足作り、50足ぐらい用意していることもあったが、農繁期等には使いきって、必要に応じて夜なべして作ることが多かった。
4. **ワラジ**：遠出のときにはいた。
5. **ミノ**：一つ作るのに藁を3束使い1日がかかりであった。
6. **フゴ**：直径24cm程の大きさで弁当箱を入れるものや、直径60cmのナッパ入れ、モミ入れなどに使った。
7. **コモ**：神社の敷物やモミ干しのときムシロの下に敷いて使った。
8. **俵**：冬の間二重俵を作った。
9. 水車の米つき用の直径30cm程の輪。
10. **ナワ**：雪の日、若者3～4人が一ヶ所に集まって半日で3束ぐらいの藁束を使って

ナワナイをした。米俵用の編みナワは特に丁寧にしたが、炭俵用は大ざっぱでよかった。屋根葺用には糯藁を使う。

11. 藁マブシ：養蚕用

以上のような藁細工は、昭和30年代に便利な農具や衣類等が普及すると作らなくなったが、それまでは主に冬の間、7時から10時ぐらいまで夜なべをしたという。

次に、購入したものをあげる。

1. **テシマ**：田植、草取に使用。月ヶ瀬村と隣接する三重県上野市で買った。
2. **ムシロ**：村内にムシロを専門に織る家が昭和33、34年頃まで1軒あった。鳥梅の乾燥、茶葉の床モミ、モミ・大豆・小豆等を干すとき等に使ったので30～40枚は必要であり、毎年20～30枚は新しいのを買った。
3. **牛の飼料**：牛を飼っていた昭和32年頃までは、近くで不足分の藁を買った。
4. **茶木の肥料**：昔は刈草を茶の木の下にまいたが、茶摘みを機械刈りするようになると茶葉を入れる袋に草の中に混った枯枝等がひっかかるので、草のかわりに藁をまくようになった。しかし、自家の藁だけでは足りないなので、上野市近郊(大野木・与野など)から現在は購入している。

このように、自家製、購入を通してみると、藁が稲作だけでなく、その他の生業においても広く活用され、藁細工をしなくなった今も利用されている事がわかる。

※月ヶ瀬村桃香野の東久保伊一郎氏（明治34年生）、中興勝繁氏（明治37年生）からの聞き取り調査をもとにしたことを記し、ご協力に感謝いたします。

★★★★ おしらせ ★★★★★

●民俗博物館の行事予定

☆58年9月23日～11月11日

特別テーマ展「山の信仰と吉野修験」

☆上記の特別テーマ展開催に伴う展示替えを9月13日～9月22日の間に行ないます。その間テーマ展々室を閉室いたします。

☆7月30日(土)・31日(日) 体験学習講座

〈特集・竹カゴづくり〉

☆9月25日(日) 体験学習講座〈ワラフゴづくり〉

☆11月27日(日) 体験学習講座〈シメナワづくり〉

※体験学習講座に参加ご希望の方は、材料配布の関係上、往復ハガキでお申し込み下さい（但し見学は自由です）。講座の時間は、特集を除いてAM1～PM4です。

※特集の場合は、1日目はPM1～PM4、2日目はAM10:30～PM3:30です。

☆昭和58年10月16日～11月27日 民俗カルチャー講座〈民俗コースⅡ〉を開講します。

●民俗コースⅡ〈神々を祀る民俗と芸能〉

58% 山の神まつり

% 水神に祈る踊り～雨乞習俗として～

% 野神まつり

% 田の神への誘い～御田植神事から～

※上記の講座は募集制になっておりますので、ご希望の方（全回出席可能な方）は当館へ往復ハガキ（コース

名、住所、氏名、年令、電話）でお申し込み下さい。

なお、詳細については当館へお問合せ下さい。

☆予告：民俗カルチャー講座・民家コース（街道・寺内町そして町屋）は、58年2月19日～3月18日の開講です。

《表紙解説》毎年5月3日に、大峯山寺の戸開式が行なわれる。この戸開式については、本誌「大和の民俗行事」で詳しく述べているので、それを参照されたい。

■編集後記■

暖かさと肌寒さが交互に訪れ、雨の多い四月も過ぎ、五月初旬の日差しがあたかも初夏のまばゆい陽を想わせる日々も、旅人のごとく過ぎ去っていった。そして、夏の陽をあらわに見せはじめた六月。

公園の花木も、桜から紫陽花へと変わりつつある。白から赤へ、赤から紫へと色あいも変化してきた。そして、民家も。今、十津川の民家が移された。

この自然の中で、博物館は、やっと九歳を迎えようとする。この時の流れが、少しづつ人の情を変えさせる。一歩一歩登りつつある上向きな変化。もうそこで止まってしまった変化。少しづつ傾斜していく変化。そして、横ばいの変化。

すべてが〈変化〉という名で呼ばれ、それぞれの道がさだまっていく。

博物館も、さまざまな人たちの支えによって前向きな変化に情熱をもやしていきたく願う。今。(★)